

■ ■ 「無知の知」とはどういうことか ■ ■

問答を繰り返すことでソクラテスは、「人間にとって本当に大切なこと」つまり「徳」については、誰一人として知っていないことに気づいた。しかし、自分には知恵があると思っている人たちは、実際には知らないのに、知っていると思い込んでいた。

ソクラテスは、自分には知恵がないと気づいている。しかし、他の人は気づいていない。この、無知に気づいている（「無知の知」を持つ）分だけ、ソクラテスは他の人々より知恵があることになる。

ソクラテスは、神が人間に実際には知恵がないのに、あるという思い上がりをいさめようとしたのだと考えた。

■ ■ ソクラテスの死と正義 ■ ■

ソクラテスは、知恵があると思い込んでいる人々の無知を暴いていったために、恨みを買って裁判にかけられることとなった。彼は裁判でも自分の正当性を堂々と主張し、不正を働いていない自分にふさわしいのは刑罰ではなく国立迎賓館でもてなすことであるとまで主張した。

その結果、一般市民の裁判官の多数決で、死刑判決が下された。

監獄にあっても、脱出して海外で過ごすように勧める誘いを、不当な判決を受けたからといって脱獄が不正であることにはかわりはないと断って、死刑執行を受け入れた。

ソクラテスの考え方には賛否両論があるだろうが、ここに民主主義の難しさがあることは確かである。

◇ コラム ◇

ソクラテスは問答ばかりしていて、妻クサンティッペが文句を言っても耳を貸さない。怒った妻が水をかけたけれども、ソクラテスは動じないので、周りの人が驚くと、「雷が鳴った後には、雨が降るものさ」と言ったとか。ただしこうしたエピソードは、だいたい後の時代につくられたもので、実際のソクラテスの妻についてはよくわからない。